

第5群 座長のまとめ

東 北 大 学

高 坂 知 節

この群の3演題は、いずれも Broncasma Berna (BB) によるネブライザー療法の有効性・安全性に関する研究報告であった。上気道常在菌8種をワクチン化した本剤は、成分中に各種菌体及びその自家融解産物を含み、皮下注射法によって、気管支喘息、鼻アレルギー、慢性副鼻腔炎に適用され、みるべき効果を挙げてきたが、本剤の局所投与の検討は未だ十分になされていない。この様なワクチン製剤を局所投与する場合にまず問題とされなければならないのは、ワクチンの抗原性によって抗体産生が惹起されアナフィラキシーショックのような過激な生体反応を誘起しないかどうかという点であろう。この点については、前群において東北大・石垣より動物実験結果が報告され、本剤は少なくとも繰り返し局所投与によってIgE抗体産生をもたらす危険性は少ないと報告されたので、動物実験レベルでの安全性は確立された。しかし、人間に投与した場合の生体反応については未だ十分な検討はなされておらず、今後の問題として残されている。また、BBの局所投与の場合の濃度に関しても、稲垣ら(名市大)は、0.5ml BB液を12倍希釈、志水ら(兵庫県医会)は1mlを5倍希釈して用いており、報告者によってまちまちであった。用いた機器は、3演題とも超音波ネブライザー装置(オムロンNE-010B)を使っており、投与方法も週2回、8週間と画的であった。少なくとも現在までは、いずれの試験においても副作用の発現をみておらず比較的安全性の高い薬剤の印象を受けるが、投与が頻回になりかつ長期間に亘った場合などのチェックはなされておらず、IgE-RIST、RAST等の検索と相俟って今後も慎重に見守っていかねばならない問題であろう。報告の結果では、いずれの演者も有効性を力説していた。稲垣(名市大)は、慢性副鼻腔炎患者26例に本法を用い、中等度以上の自覚症改善率は、主治医判定52.0%、統一判定基準では60.0%、他覚的所見改善率は28.0%、36.0%、X線所見改善率は17.4%、26.1%、全般改善率は44.0%、34.8%だったという。志水(兵庫県医会)は、アレルギー性鼻炎では、主治医判定45.5%、統一判定54.5%、慢性副鼻腔炎と鼻アレルギー合併例では58.1%、61.3%であったという。更に、北奥(奈良医大)らは、やや有用以上82.5%、有用以上32.5%の結果を得たという。

ネブライザー療法に関しては、その有効性を厳密に検討した報告が少ない。また、使用薬剤についても、疾患や症状に応じて適宜選択するような習慣がない。従って、本剤のような、いわゆる変調療法として全身的に用いられてきたものを局所に应用する考えは今後のネブライザー療法の進歩に欠かすことが出来ないであろう。しかし、冒頭にも触れたように、その安全性については、ラボラトリーレベルでの厳密なチェックを忘れてはならない。